P-2

Verum 焦点と文強勢：中国語の副詞 ke の例から

伊藤さとみ

要旨：本発表では、中国語の副詞 ke を取り上げ、文強勢と焦点の関係を明らかにする。文強勢は、焦点を示唆するが、強勢と焦点は常に 1 対 1 の関係にあるわけでなく、焦点領域は強勢が置かれた要素から一定の規則に従って命題全体まで拡大し得る（F-Assignment Rules）。だが、強勢が副詞に置かれており、焦点領域を拡大できないにも関わらず、命題が焦点であることがある。本発表では、中国語の副詞 ke が強勢を持つ場合を取り上げて、文中の要素がすべて既知であるが、その命題が事実であることを強調したいときに、ke に強勢を置いて命題の真理値が焦点（Verum 焦点）であることを示すと主張する。また、副詞 ke に強勢がない場合には、命題全体が焦点となり、文脈にある他の命題と対比されていることを示す。

キーワード：現代中国語、形式意味論、プロソディ、焦点、文強勢

1.　はじめに

本発表では、中国語の副詞 ke を取り上げ、文強勢と焦点の関係を明らかにする。中国語の副詞 ke は、その現れる文脈などにより、(1)にあるような様々な意味を表す。また、強勢の有無により、二つのグループに分けられる。伊藤(2022、2023)によると、持続時間において、図 1 のような意味による差が見られた。

(1) a.叙述内容が事実であることを強調する
　b.意外性を表す
　c.程度が高いことを表す
　d.望みがやっとかなうことを表す
　e.切実な言い含めや希望を表す
　f.疑問を表す
　g.反駁を表す
　f.その文が先行文と対立することを表す

このうち、はっきりと強勢があるものは「望みがやっとかなうことを表す」である。他に「程度が高いことを表す」も、図 2 から分かるように、形容詞を修飾する場合は他を修飾する場合と比べて持続時間が有意に長いことがわかっている。また、サンプル数が少ないため、確証はないが、「疑問を表す」も強勢を持つ傾向にある。本稿では、この三つの ke と強勢のない ke について、命題の前提が異なることを示し、焦点構造の違いが強勢の有無を導くことを説明する。

図1 語気ごとの持続時間

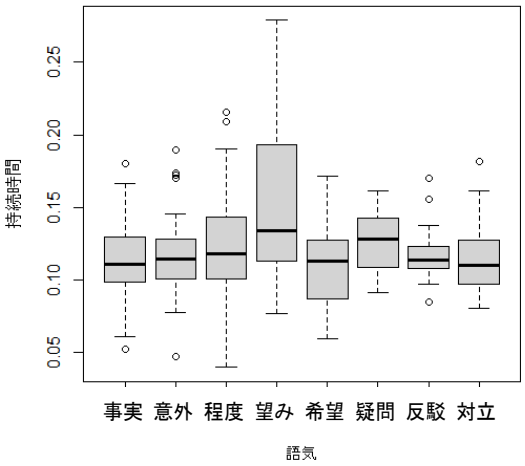
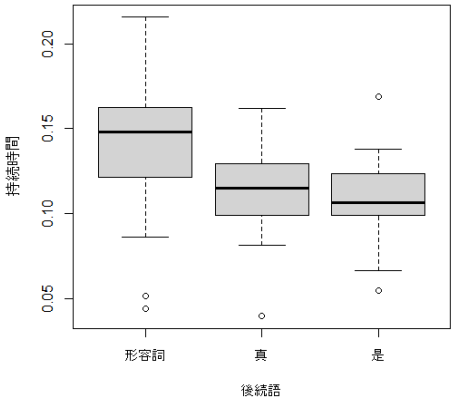


図2「程度が高いことを表す」用法における持続時間の違い



2.　命題焦点と Verum 焦点

ここでは、命題全体が焦点となる場合を命題焦点、真理値に焦点を置く場合を Verum 焦点と呼ぶ。両者の違いは(2)のとおりである。

(2) 命題焦点と Verum 焦点の違い

焦点の種類	焦点	代替集合を構成する要素
命題焦点	命題	共通基盤中の目立つ命題
Verum 焦点	真理値	命題に対して異なる真理値を持つ可能世界

命題焦点は、文全体が新情報である命題(all-new focus)とは異なり、必ず代替集合との対比としての焦点命題である。形式的には、以下のように定義される。

(3) 命題ϕが命題焦点であるとは、以下の条件を満たす命題ψが文脈に存在する時である。

i. ψはϕの代替集合である。

ii. 現在の文脈が$\neg[\phi \wedge \psi]$を含意する。

Verum は Höhle (1992)が初めて提唱した概念で、命題の真理値を決定する働きを担う演算子である。Verum が焦点となる場合、対比されるのは可能世界であり、同一の命題が参照世界で持つ真理値と、参照世界と十分に近い可能世界で持つ真理値が対比される。形式的には、以下のように定義される。

(4) 命題ϕが可能世界 wにおいて Verum 焦点であるとは、以下の条件を満たす w'が存在する時である。

i. w'は wの代替集合である。

ii. $[\![\phi]\!]^{w} \neq [\![\phi]\!]^{w'}$

以下、ドイツ語の心態詞 doch を例にとり、命題焦点と Verum 焦点の違いを説明する。心態詞 doch は、命題が既知情報であることを示す(Jacobs 1991、Zeevat 2004、Karagjosoba 2004)。この機能に加え、Grosz (2010)は、強勢のない doch は、例えば、次のような文脈で、{Jan needs to cook, Jan washed up}という代替集合をもとに“Jan washed up”という命題に焦点を置くことを指摘している。

(5) Jan muss nicht kochen. Er hat doch abgewaschen. (Grosz 2010)

PN needs NEG cook he has doch washed.up (Jan doesn't need to cook. He [doch] washed up.)

一方、Egg and Zimmermann (2012:226)は、強勢のある doch（以下、DOCH と記す）は、次のような二つの可能世界における同一命題の真理値を対比するような会話に使われると指摘している。ここでは、話し手 B は自分の信念世界における命題の真偽を話し手 A の信念世界の命題の真偽と対比して述べている。

(6) A: Malte ist nicht nach Utrecht gefahren. B: Er ist DOCH nach Utrecht gefahren.

PN COP NEG to Utrecht gone he COP DOCH to Utrecht gone

(A: Malte didn't go to Utrecht. B: He [DOCH] go to Utrecht.)

心態詞 doch の強勢は意味論と音声学の妥協の結果与えられる。Verum は音声形式を持たないため、強勢をもつことができない。一方、doch を含む命題は既知情報である。そのため、文中の単語に強勢を置くと、命題全体ではなく、既知情報に焦点を置くことになる。このことを避けるため、doch が強勢を持ち、Verum 焦点を表すのである。

3. 本発表の主張

本発表では、ドイツ語の doch とよく似た働きをする、中国語の強調の副詞 ke について、文強勢を伴う場合の意味と伴わない場合の意味を比較し、以下の二つの主張をする。

① 文強勢を伴う ke（以後 KĚ と記す）は Verum 焦点を示唆し、強勢を伴わない ke（以後 kě と記す）は命題焦点を示唆する。

② 両者の強勢上の違いは、Schwarzschild (1999)の AVOIDF により導かれる。

3.1. KĚ の意味論

KĚ は、「望みがやっとかなうことを表す」、形容詞を修飾する場合の「程度が高いことを表す」、「疑問を表す」の三つの用法がある。以下、逐語訳は下線部のみ付す。

3.1.1. 望みがやっとかなうことを表す KĚ

以下は、望みがやっとかなうことを表す KĚ の例である。

(7) 文脈：主人公の父は事故に遭い、7 年間も意識不明の状態で寝ている。ある日、主人公の伯母が父に付き添っていると、ベッドから「毛布が重い」という声が聞こえ、伯母は慌てて祖母に電話をした。

“妈妈！加利说话了！加利说话了！”接着她把话筒放到爸爸耳边，奶奶说：“是加利吗？”

爸爸答道：“妈妈！”

奶奶又说：“加利，我的好儿子，<u>你　　在　　说话！　你　可 说话 了</u>！”

あなた ～ている 話す あなた KĚ 話す SFP

（「ママ、ガリがしゃべったわ！ガリがしゃべったわ！」すぐに伯母は受話器を父の耳に当てた。祖母は「ガリなの？」と言った。父は「ママ！」と答えた。祖母は「ガリ、私の愛しい子、<u>しゃべっているのね、やっとしゃべるようになったのね！</u>」と言った。）

(8) 文脈：愛琴は養母と離れて祖母の家で辛い生活を送っていた。そこへ、養母が男の人と一緒に愛琴を迎えに来て、祖母の家から連れ出してくれた。養母たちは、愛琴を連れて写真館に行き、写真を一枚撮り、新しい服を買ってくれた。養母はうれしそうに愛琴に言った。

“孩子，<u>这回　你　可 真的　　要　　回到　自己的 家 了</u>，以后再也不会挨打受气了！”

今回 あなた KĚ 本当に 予定だ ～へ帰る 自分の 家 SFP

（「わが子、<u>今回はやっと本当に自分の家に帰るのよ</u>。今後は辛い目に遭うことももうないのよ。」）

(9) 文脈：主人公たちは母にプレゼントを贈る計画をしている。主人公の母は朝から晩まで家事をし、主人公たちの世話をし、家族の衣類の洗濯をして忙しく過ごしているが、一言の不満も言わない人である。

她很少笑。不过，她要笑起来，<u>那　可　就　是　不　负　我们　盼望 的 赏心乐事</u>。

それ KĚ 強調 COP NEG 裏切る 私たち 期待 の 喜び

（彼女はほとんど笑わない。だが、彼女が笑うと、<u>それは私たちの期待を裏切らない喜びだった</u>。）

(7)~(9)の例では、KĚ を伴う命題の内容は、待ち望んでいたことであり、真理値を除外すれば、以下のように、既知の情報ということができる。

(10) 命題 ϕ について、KĚ(ϕ)であるとき、$\phi \in$CG

＊CG は会話の背景の一部として当たり前のことと認められている命題の集合　(Stalnaker 1978) [1]

3.1.2. 形容詞を修飾して程度の高いことを表す KĚ

以下は、形容詞を修飾して程度の高いことを表す KĚ の例である。

(11)文脈：主人公は祖母から時計をプレゼントしてもらった。それを枕元に置いて寝ていると、玄関のドアが開く音が聞こえた。

是爸爸回来了。<u>我 可 高兴 了</u>，因为我能给他看看外婆给我的礼物。

私 KĚ 喜ぶ SFP

[1] Stalnaker (1978) は聞き手の持つ前提を共通基盤（the common ground）とし、共通基盤は、会話の背景として当たり前とみなされる前提の集合であるとみなしている。

（父が帰ってきたのだ。私はとてもうれしかった。祖母がくれたプレゼントを父に見せることができるからだ。）

(12)文脈：主人公は二十年勤めた仕事を理由なく辞めさせられ、仲間に見送られて出ていこうとしている。

弟兄们有含着泪把我送出来的，我还是笑着；世界 上 不平 的 事 可 多 了，我还留着我的泪呢！

世界 上 不公平 の 事 KĚ 多い SFP

（仲間たちは目に涙をためて私を送り出してくれたが、私は笑いながらこう言った。「この世に不公平なことはとても多い。自分の涙はまだとっておこう！」）

形容詞を修飾して程度が高いことを表す場合は、程度副詞および形容詞の意味の中に命題を既知として扱う仕組みが含まれている。(13)は、Creswell (1977)の程度形容詞の定義と Kennedy and McNally (2005)の程度意味論による程度副詞を伴う形容詞述語文の分析である。形容詞の程度を決めるためには、当該文脈 c におけるその形容詞の属性を持つ個体の集合（$\lambda y.[\![pos(\lambda x[\mathrm{happy}(x)=d])(y)]\!]^c$）が比較のために必要である。従って、(14)のように共通基盤にその形容詞の属性を持つ集合が仮定される。

(13)John was very happy.

$= [\![\mathrm{John}]\!]^c \in [\![\mathrm{very}]\!]^c([\![\mathrm{happy}]\!]^c)$

$= \mathrm{j} \in \lambda G \lambda x.\exists d[\mathbf{standard}(d)(G)(\lambda y.[\![pos(G)(y)]\!]^c) \wedge G(d)(x)](\lambda d \lambda x[\mathrm{happy}(x)=d])$

$= \mathrm{j} \in \lambda x.\exists d[\mathbf{standard}(d)(\mathrm{happy}(x)=d])(\lambda y.[\![pos(\lambda x[\mathrm{happy}(x)=d])(y)]\!]^c) \wedge \mathrm{happy}(x)=d]]$

(14)程度形容詞 A について、*KĚ*(A)であるとき、$\exists \mathrm{x.A(x)} \in \mathrm{CG}$

3.1.3. 疑問文を作る KĚ

KĚ には（主に方言において）*yes/no* 疑問文を作る働きがある。

(15)文脈：丁鵬と謝小玉が話している。謝小玉が父は謝暁峰だというのに対し、丁鵬は謝暁峰が彼の招きに応じなかったことを根に持ち、謝暁峰に娘がいると聞いていないと謝小玉を冷たくあしらっている。

谢小玉忽然明白了笑道："你 可 是 因为 我父亲 没有 接受 你的 邀请 而 生气？"

あなた *KĚ*COP だから 私の父 NEG 応じる あなたの 招き そこで 怒る

（謝小玉は突然思い当って笑いながら言った。「あなたは私の父があなたの招きに応じなかったので怒っているの？」）

真理値を問う疑問文において、命題内容は前提として調整され、真理値を焦点とする。発話の際に、肯定と否定の命題は、次のように会話の共通基盤にあると考えられる。

(16)命題 ϕ について、ϕ？であるとき、$\{\ \phi, \neg\phi\ \} \in \mathrm{CG}$

以上をまとめると、KĚ の使用条件は次のように定義することができる。

(17)KĚ の使用条件：命題 ϕ、発話の文脈 c に対し、$\phi \in \mathrm{CG}^c$ のとき、$[\![KĚ(\phi)]\!]^c = [\![\phi]\!]^c$ である。

つまり、命題が KĚ を伴うとき、その内容が既知であり、真理値が焦点、つまり、Verum 焦点となる。

3.2. kě の意味論

kě には、「叙述内容が事実であることを強調する」「意外性を表す」「切実な言い含めや希望を表す」「反駁を表す」「その文が先行文と対立することを表す」という働きがある。

3.2.1.　叙述内容が事実であることを強調する kě

叙述内容が事実であることを強調すると考えられる kě は、文脈に何らかの形で存在している命題に対する否定としての機能を持つ。次の例は妻の質問が前提とする「アインシュタインは奥様方がどんな服を着ていたか知っている」という命題を否定している。

(18)文脈：アインシュタインは、晩餐会に出席したが、男性は白ネクタイを締め、女性はベアショルダーのドレスを着ていた。アインシュタインの妻は、風邪で出席できなかったので、アインシュタインに晩餐会の様子を尋ねた。著名な科学者がいたと言いかけるアインシュタインを遮って、妻はこう尋ねた。

“不要管那些，你告诉我太太们穿什么衣服?”

“我 可　真的　 不　　知道，”爱因斯坦认真地回答，

私 kě 本当に NEG 知っている

“从桌子以上的部分看，她们没有穿什么东西；而在桌子以下的那部分，我可不敢偷看。”

(「それはいいから、奥様方がどんな服を着ていたか教えて」「私は本当に知らないんだ」アインシュタインは真面目に答えた。「テーブルの上の部分を見るに、何も着ていなかったが、テーブルの下の部分については、盗み見る勇気は絶対なかったから。」)

3.2.2.　意外性を表す kě

意外性を表す場合、必ず話し手はなんらかの状況を予想しており、予想が裏切られたことを述べている。kě を伴う命題は、話し手の予想を表す命題に対する否定の機能を持っている。

(19)文脈：1967 年の旧正月の夜に主人公はこっそり家に戻った。両親は造反派に捕らえられており、主人公も造反派に追われている。家の扉を開けた伯母は主人公の帰宅に驚き、家に引き入れて言った。

“谁让你回来的？造反派闹得很凶，天天有人来抄家，你爸妈也不知叫造反派揪到哪里去了，只有开批斗会的时候，才知道在谁手里。造反派正到处找你们，说要斩草除根，你　 可　就　　回来　　了。”

あなた kě もう 帰ってくる SFP

(「誰があなたを帰らせたの？造反派は暴れまわっていて、毎日家を捜索し、あなたの両親も造反派がどこに連れて行ったかわからない。批判の会があるとき、やっと誰の所かわかる。造反派はあなたたちを探し回って、草の根を分けてでも探し出すと言っているのに、あなたはなんとまあ帰ってきた。」)

3.3.3. 切実な言い含めや希望を表す kě

言い含めや希望は、それらと相反する状況を想定して述べられる。kě を伴う文は、この想定の否定という働きを担っている。

(20)文脈：開天と暖暖は、北京の譚おじさん一家が引っ越してくるために、部屋を片付け、８人分の寝室を用意し、譚おじさんからの知らせを待ちながら、譚おじさんの気が変わりやしないかと心配している。

天哪，你　 可　是 一定要 来,你要不来,我们这日子怕是都过不成了,投入的东西太多了!

あなた kě COP きっと 来る

(ああ、きっと来てくださいよ。あなたが来なければ、私たちの生活が成り立たなくなる。準備にどれだけかかったと思うの！)

3.3.4. 反駁を表す kě

反駁を表す場合は、先行する文脈に現れた命題の否定として発話されている。

(21)文脈：A は B に芸術家としての心構えを説いている。

A:　“你急需动眼，动脑，不是动手。天黑了，人们说晚上了。作为艺术家，不仅要知道是晚上，更要知道晚上的天为什么会黑。”

B:　“我 可 不 是 天文学家，”

私 kě NEG COP 天文学者

A: “艺术家必须具备科学家的思维能力，公正，客观，找出事物的本质。艺术家与科学家是同一屋檐下两个不同的名称……”

（A:あなたは目と脳を働かせ、手を働かせるのではない。暗くなった時に、人々は夜が来たというが、芸術家としては、今が夜だというだけでなく、夜の空はなぜ暗いかを知らなければならない。B:私は天文学者ではありません、A:芸術家は科学者の思考能力を備え、公正に、客観的に事物の本質を探し出さなければならない。芸術家は科学者と同じ屋根の下の二つの異なる名称なのだ……）

3.3.5. その文が先行文と対立することを表す kě

先行文と kě を伴う文が対比を形成し、二つの命題が両立しないことを述べている。

(22)文脈：主人公が住んでいる寮の部屋の隣には、夜遅くまで書き物をする学生が住んでおり、その打鍵音が毎晩２時まで主人公の部屋に聞こえている。主人公は打鍵の音が止むまで読書をして過ごし、それから明かりを消して寝ることにしていた。ある日、主人公が打鍵の音の止んだ後も読書していたところ、その学生がドアをノックしたのでドアを開けた。開けるとすぐ、彼女はこう言った。

“你　　不　睡，我 可　要　睡，你门上面那块毛玻璃透出来的光，叫我整夜失眠；

あなた NEG 眠る 私 kě ～たい 眠る

你不知耻，是要人告诉你才明白？嗯？”

（「あなたが眠らなくても、私は眠りたい。あなたのドアのあの曇りガラスから漏れている光で私は夜じゅう眠れないのよ。教えてもらわないとわからないなんて、恥知らずよ、違う？」）

以上から、命題が kě を伴うときの使用条件は以下のようであると言える。

(23)kě の使用条件

命題 ϕ、発話の文脈 c に対し、CG^c に目立つ命題 ψ があり、

i)　ψ は ϕ を焦点としたときの代替命題であり、

ii)　発話の文脈 c が $\neg[\phi$ and $\psi]$ であることを論理的に含意するとき、$[\![kě(\phi)]\!]^c = [\![\phi]\!]^c$ である。

つまり、命題が kě を伴うとき、共通基盤に対立する命題があり、命題全体が焦点となる。

4.　強勢の有無を支配する規則

以上、KĚ と kě の違いについて述べた。KĚ は Verum に焦点があり、命題内容は共通基盤にすでにあるか、共通基盤に置かれたものとみなされて背景化される。一方 kě は命題が焦点となっており、共通基盤にある別の命題と対比されている。ここでは、この違いが強勢の有無を決定することを示す。

強勢の位置が焦点を示唆することは、Gussenhoven (1983)などで、古くから指摘されている。Selkirk (1996)は、強勢がある単語がそのまま焦点であるわけでないことを指摘し、次の規則を提案している。

20) F-Assignment Rules　　(Selkirk 1996)

Basic F-Rule: An accented word is F-marked.

F-Projection: a. F-marking of the head of a phrase licenses the F-marking of the phrase.

b. F-marking of an internal argument of a head licenses the F-marking of the head.

Schwarzschild (1999)は、Selkirk (1996) の F-Assignment Rules に加え、次の制約を提案している。

22) *AVOIDF*: F-mark as little as possible, without violating *GIVENness*.

23) *GIVENnese*: If a constituent is not F-marked, it must be *GIVEN*.

以上の三つの規則から、次の例の強勢と焦点の関係が説明される。(24B)は命題全体が焦点となっているが、強勢は文末の語にある。これは、(20)の規則により、命題全体まで焦点領域を伸ばすからである。一

方、(25B)では、強勢は動詞に、焦点領域は動詞句にある。文末の語が強勢を担わないのは、(22)-(23)の制約による。

24) A: What did Mary do?　　B: She [praised [her [BROTHER]$_F$]$_F$]$_F$

25) A: What did John$_i$'s mother do?　　B: She [[PRAISED]$_F$ him$_i$]$_F$

KĚ を伴う文では、Verum が焦点、命題内容が既知となるが、Verum は音声形式を持たず、文強勢を担うことはできない。一方で、AVOIDF により、命題のいずれかの成分に強勢を置くことも好ましくない。そこで、Verum の代わりに KĚ が文強勢を担う。これに対し、kě を伴う文は、共通基盤中の命題と対比されており、命題内容が焦点である。従って、命題中の他の要素が文強勢を担い、kě に強勢は置かれない。

5. まとめ

以上、命題に焦点をあてるあり方に、Verum 焦点と命題内容焦点の二種類があることを、中国語の例により検証し、それぞれの焦点に対する代替集合の違いにより、強勢の有無が予測できることを示した。

<Abbreviations>

COP: コピュラ動詞　NEG: 否定　PN: 固有名詞　SFP: 文末助詞

<References>

Creswell 1977. The semantics of degree. In *Montague grammar*, ed. Barbara Partee, 261-292. New York: Academic Press. / Egg and Zimmermann 2012. Stressed out! Accented discourse particles: The case of 'DOCH'. *Proceedings of Sinn Und Bedeutng* 16(1): 225-238. / Grosz 2010 German *doch*: An element that triggers a contrast presupposition. *Proceedings of the Chicago Linguistic Society* 46: 163-177. / Gussenhoven 1983. Focus, mode and the nucleus. *Journal of Linguistics* 19: 377-417. / Höhle 1992. Über Verum-Fokus im Deutschen. In *Informationsstruktur und Grammatik*, ed. Joachim Jacobs, 112–141. Opladen: Westdeutscher Verlag. / Jacobs 1991. On the semantics of modal particles. In *Discourse particles: Descriptive and theoretical investigations on the logical, syntactic and pragmatic properties of discourse particles in German*, ed. Werner Abraham, 141-238, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. / Karagjosova 2004. German *doch* as a marker of given information. *Sprache & Datenverarbeitung* 28(1): 71-78. / Kennedy and McNally 2005. Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language* 81(2): 345-381. / Schwarzschild 1999. "Givenness, avoid F and other constraints on the placement on accent." *Natural Language Semantics* 7:141-177. / Selkirk 1996. "Sentence prosody: intonation, stress, and phrasing." In Goldsmith (ed.), *The handbook of phonological theory*, Blackwell, 550-569. / Stalnaker 1978. "Assertion."In Cole (ed.) , *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, Academic Press, 315-332. / Zeevat 2004. Particles: Presupposition triggers, context markers, or speech act markers? In Blutner and Zeevat (eds.) Optimality theory and pragmatics, 91–111. Houndmills:Palgrave. / Zimmermann and Hole 2008. "Predicate focus, Verum focus, verb focus: Similarities and differences." Paper presented at *Workshop on predicate focus*, Uni Potsdam & SFB 632. / 伊藤 2022.「中国語の語気副詞 " 可 " の多義性－音声持続時間の観点から」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 42 号: 57-74。/ 伊藤 2022.「中国語副詞"可"の語気」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 41 号: 57-79。